View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by KeiO Academic Resource Archive

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	㊙ 乙 第　　号	氏　名	加藤　寿寿華

論文審査担当者　　主　査　衛生学公衆衛生学　武　林　　亨
内科学　鈴　木　則　宏　　救急医学　佐々木　淳　一
解剖学　仲　嶋　一　範
学力確認担当者：　　審査委員長：鈴木　則宏
試問日：平成２９年１２月２９日

（論文審査の要旨）

論文題名：Effects of a school-based stroke education program on stroke-related knowledge and behavior modification－school class based intervention study for elementary school students and parental guardians in a Japanese rural area
（学校における脳卒中教育プログラムが脳卒中の知識や行動変容に与える影響－小学生とその保護者を対象とした啓発介入研究）

本研究の目的は栃木県の小学生とその保護者に対して、脳卒中の症状と対処方法を略したFAST（Face,Arm,Speech,Time）を用いた脳卒中啓発授業の効果を検証することである。2015年10月～12月に公立小学校11校で授業（45分）を実施し、質問票に回答した小学6年生（268名）とその保護者（267名）を解析した。自己記入式質問票を授業前、授業後、授業3か月後に実施し、脳卒中の症状、危険因子、対処方法、危険因子への行動変容（保護者のみ）を評価した。結果、小学生と保護者において脳卒中症状、危険因子、対処方法の正解率は授業前後で正解率が有意に向上し、危険因子や対処方法（小学生のみ）に関しては授業後3カ月後での正解率が有意に減少した。また、授業前と比べて3か月後で、実際に生活習慣改善に取り組む人が増加した。FASTを使用した脳卒中啓発は脳卒中の知識を向上させ、行動変容を促した。

審査では、最初に①保護者の属性による正解率の違いを問われた。家族の続柄や医療従事者の有無を層別解析したが、大きな違いは見られなかった。第2に②今回の啓発方法（45分を1回）はスタンダードであるかについて問われた。これは小学校ベースで行われている先行研究の多くがこの手法を取っており、保健体育の授業に取り入れやすい形式で導入している。次に③FASTの言葉が日本で適応できるかどうかについて問われた。今回は英語をあまり使わず、かお、うで、ことば、時間を強調することで、理解しやすく適応可能である。④子供から親に伝える教育形式は、どのように評価されているかについて問われた。これは自己効力感を高めることが健康行動を促すとされており、今回の形式は子供が伝えることで行動変容した。また⑤講師による違いについて問われた。今回、講師の職種ごとに正解率を見たところ違いはなく、その他の研究でも専門家と小学校の教員による正解率の違いは見られなかった。次に⑥小学生と保護者の正解率の一致性に関しては、本研究では小学生と保護者の正解率の相関は少しみられた。また⑦講義の標準化に関しては、講師は同じ資料とアニメを使用し、FASTを振り返るようにレクチャーを受けていた。実際に講師ごとに正解率の変化を検討したが、違いは見られていない。最後に⑧脳卒中啓発による県全体の効果と今後の展開について問われた。効果に関しては早期受診やtPA実施率の上昇が考えられる。実際に脳卒中登録では発症入院期間の短縮が報告されている。今回の研究は1回の授業による効果を検証したもので、繰り返し実施する効果について検討していく必要がある。

以上、今後は長期的な啓発の効果を検討する必要があるが、都市部以外の脳卒中ハイリスク地域で実施された研究として脳卒中の知識や危険因子に関する行動変容を示した有意義な研究であると評価された。